

## 民間暦 昭和二十四年「やすくに暦」

―暦注に問題多く不採用―

大谷 光 男

### 〔書評〕

靖国神社は昭和二十年八月、敗戦直後に占領軍による神道指令で、国家神道から分離した。具体的には、昭和二十年（一九四五）十二月十五日、国家神道廃止令が連合軍最高司令官から日本政府に伝達、「国教分離指令」ともいわれ、公式文書名は、

国家神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並びに弘布ノ廃止ニ関スル覚書、

とある。また同月、伊勢神宮の暦編纂を中止、しかし民間暦編纂の基準のために、翌年一月から暦要項が東京天文台（東京大学）から毎年二月一日の「官報」に直接刊行されて、昭和六十三年一月からは国立天文台に移行し今日に及んでいる。

戦後の数年は各地の神社・仏閣から出版された暦には、暦字上の問題はなかったが、従来、暦に付随していた暦注の「繰り方」に初歩的な誤りが記載、または発見されることが少なくなかった。しかし、占領軍は暦注に対して、指示することもなく、従来の風習を守ることができた。

本稿で問題とするのは民間暦である、昭和二十四年「やすくに暦」の暦注のうちの「六曜」と「十二直」であって、二者

の暦注の「繰り方の誤り」を指摘するに止める。

まず六曜であるが、その撰日は月切りツギキ（月の一日を基準とする）である。左表は内田正男『暦と時の事典』（雄山閣、昭和六十一年五月刊）にある六曜の図表である。六曜（旧暦の日付による）の順序は、

先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口

である。左表が示すとおり、

一月一日と七月一日とは先勝から数え、  
 二月一日と八月一日とは友引から数え、  
 三月一日と九月一日とは先負から数え、  
 四月一日と十月一日とは仏滅から数え、  
 五月一日と十一月一日とは大安から数え、  
 六月一日と十二月一日とは赤口から数え、

（左表）

一日	七日	十三	十九	廿五	先勝	正月 七月
二日	八日	十四	二〇	廿六	友引	二月 八月
三日	九日	十五	廿一	廿七	先負	三月 九月
四日	十日	十六	廿二	廿八	仏滅	四月 十月
五日	十一	十七	廿三	廿九	大安	五月 十一月
六日	十二	十八	廿四	三〇	赤口	六月 十二月

閏月は、その月にしたがう。昭和二十四年閏七月のばあいは、前月の七月に倣って、先勝となる。この二十四年暦で六曜の誤りは、十月一日から同月五日までの五日間である。正しく撰日されている靖国「昭和二十四年暦」とを比較すると、左のようになる。

10月 (旧暦)			1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	
仏滅	友引			先負	仏滅	大安	赤口	先負	仏滅	大安	赤口	先勝	友引	昭和24年 「やすくに暦」 靖国「昭和24年暦」
大安														
赤口														
先勝														
友引														
先負														
仏滅														
大安														
赤口														
先勝														
友引														

なお、六曜を九星と横に並列して、十二直の下に配していることである。著者の見識とみるべきであろうか。六曜は明治時代の中頃から暦に載りはじめ、九星(術)は本来が生年月日を用いる運勢判断で、平安時代に流行し、最近の運勢暦にも採用されているが、易の分野である。旧暦とも直接関係がなく、渡辺敏夫『日本の暦』にも、暦注に九星を載せていない。

次いで、十二直の暦注であるが、十二月建ともいわれ、迷信の暦注の一つである。十二直とは、北斗七星の柄の指す方位で、日本現存の最古の具注暦「天平十八年(七四六)具注暦」(正倉院蔵)にすでに載っており、暦の上段の納音の下に「建・除・満・平・定・執・破・危・成・納(漢代には収)・開・閉」と暦日に副って配置されている。仮名暦には、平仮名で書かれている。中国での初見は不詳であるが、前漢の淮南王劉安撰『淮南子』卷三、天文訓にみえる。木簡では敦煌出土に、また『漢書』王莽伝、「居攝三年(八)十一月壬子、直建冬至」とあり、これは「十一月九日壬子、冬至十一月建」のことで正しい(納は陰陽家、安倍晴明〈十世紀〉撰『簠簋内伝』が初見か)。十二直の暦注は「節切り」である。

これは月の節が基準で、十二直を月の節の前日と、節の十二直とを同一にして、順次、暦日に記載していく。説明するよりも、左の昭和二十四年「やすくに暦」の正誤表で理解されたい。日本は「夏正、建寅之月」を用いたので、古代から正月を建寅の月とする。二月は卯月、三月は辰月、四月は巳月、五月は午月、六月は未月、七月は申月、八月は酉月、九月は戌月、十月は亥月、十一月は子月、十二月は丑月とする。また十二ヵ月の節気は、左のとおり。

立春	正月節	立秋	七月節
啓蟄	二月節	白露	八月節
清明	三月節	寒露	九月節
立夏	四月節	立冬	十月節
芒種	五月節	大雪	十一月節
小暑	六月節	小寒	十二月節

昭和二十四年「やすくに暦」(新・旧暦共  
天文台計算)

新暦(現行暦)

旧暦

誤正

二月三日甲子

正月六日甲子

閉

閉

四日乙丑立春  
正月節

七日乙丑

建

閉

五日丙寅

八日丙寅

建

建

六日丁卯

九日丁卯

除

除

三月四日癸巳

二月五日癸巳

平

平

五日甲午

六日甲午

定

六日乙未啓蟄  
二月節

七日乙未

執定

七日丙申

八日丙申

破執

八日丁酉

九日丁酉

危破

九日戊戌

十日戊戌

成危

十日己亥

十一日己亥

収成

十一日庚子

十二日庚子

開収

十二日辛丑

十三日辛丑

閉開

十三日壬寅

十四日壬寅

建閉

十四日癸卯

十五日癸卯

建建

十五日甲辰

十六日甲辰

除除

四月三日癸亥

三月五日癸亥

成成

四日甲子

六日甲子

収

五日乙丑清明  
三月節

七日乙丑

開収

六日丙寅

八日丙寅

閉開

七日丁卯

九日丁卯

建閉

八日戊辰

十日戊辰

建建

九日己巳

十一日己巳

除除

十二直の配当の誤り（線で囲った部分）を、さらに旧暦の十月まで指摘しても意味がないと筆者は判断した。むしろ、編纂者の十二直の暦注の吉凶に戸惑<sup>トマド</sup>ったのが「俗信東西」なる熟語、暫く考えたが、この「やすくに暦」の編纂者（兼発行者）による個人的判断によるもので、この暦の一九頁の下段に、「建の日は建設的な事業に吉、除・開・閉目も建設的な事業に吉、破日は破壊的な事業に大吉、執・危目も破壊的な事業に吉、他は吉凶平凡の日であるといふ」とあるが、暦注を研究調査しての発言ではないようである。「昭和二十四年暦」が暦から十二直を除いたのは、十二直の繰り方だけではあるまい。また編纂者は大胆にも「暦の俗信」の欄を設けて、科学が進歩しても、迷信は排除できなく、むしろ「新旧の習俗の中に温良中正なものを探し当て楽しい国民生活を築きたい」と結んでいる。一方、「昭和二十四年神宮暦」をみると、全ては天文台の自然科学の報告で、満潮・干潮時も記入されている。欄外に伊勢神宮の祭祀・社日、天皇誕生日、憲法記念日などが眼に止まるが、循環する吉凶の暦注はない。明治五年（一八七二）の大政官布告による詔書を守つてのことであろう。詔書には「（暦注は）率ネ妄誕無稽ニ属シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シ」とある。明治前の暦の暦注は、歴史研究に必要欠くべからざる資料であるが、以後の暦注は民俗学の分野に属するようになったと教えられ、世の移り変りを、よかれあしかれ筆者はみている。

（以上）

〔参考〕

今後の若い研究者に。

中国のAD.八一五（唐代）からAD.一三三七（元代）に及ぶ間に、月建を月の朔（一日）として刻している金石文が現在十六例ある。しかし、十二直の建を月の朔とする金石文は見ることがないが、月建から推測すると有りうることで、注意されたい。